



令和8年度 くまもと GIGA スクールプロジェクト指定校

令和7・8年度 菊池市教育委員会「学力向上 (ICT 教育推進含む)」研究指定校

研究リーフレット

〔研究主題〕 自ら学び、互いに高め合う児童の育成

『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を図る単元デザインと
ICT の効果的な活用を通して



めざましマラソン・ウォーキングの
菊池市立花房小学校

研究構想

学校教育目標
自ら知を磨き 体を鍛える 花房っ子の育成

研究主題
自ら学び、互いに高め合う児童の育成
『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を図る単元デザインと
ICTの効果的な活用を通して

仮説
教師が「学びの伴走者」として、単元や1単位時間の授業の中で児童が学び方を選択できる場面を設定し、学び合いの質を高めるコーディネートができれば、児童は主体的に学びに取り組み、互いに高め合う資質・能力が育成されるだろう。

授業づくり柱1

学びを見通す（単元デザイン）の工夫

最終的なゴールの姿を教師と児童で設定し、単元計画を共有する。

ゴールを「自分事」として捉え、見通しを持って最後まで粘り強く取り組む姿

授業づくり柱3

話し合いの視点（協働的な学び）の工夫

対話の目的を確実にもたせ、多様な考えに出会わせ、「納得解」を形成させるためのコーディネートを重視する。

話し合いの目的に応じて、友達の意見を参考にしながら自分の考えを深めたり新しい価値に出会ったりする姿

授業づくり柱2

学び方の選択（個別最適な学び）の工夫

自分に合った学び方を単元や1時間の中で意図的に選択させる。

自分の特性を理解し、試行錯誤しながら自分に最適な学び方を見つけ、学習を「自己調整」する姿

授業づくり柱4

学びを価値づける（振り返り）の工夫

振り返りの視点を明確にし、教師は児童の成長を肯定的に見取る。

単元を通して、ゴールの姿を意識して振り返りを行う姿

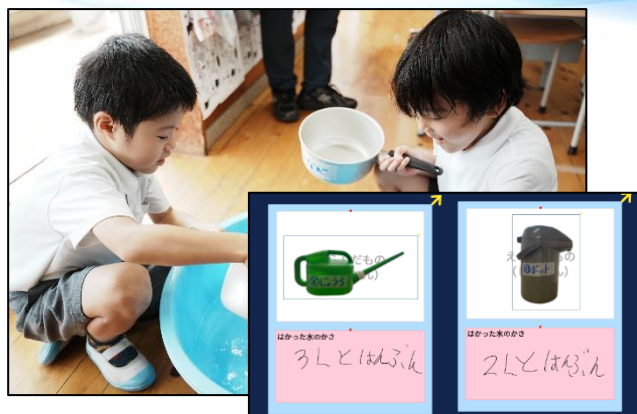
児童の実態

日常活動

家庭・地域社会の願い

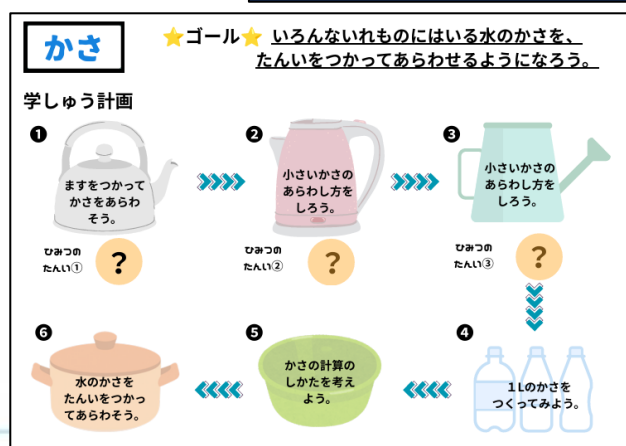
PTAとの連携

柱1 学びを見通す（単元デザイン）の実践



単元全体を見通した学習計画を児童と共有し、単元のゴールを「自分事」として捉えられるようにした。導入では既習事項や生活経験をもとに課題に気づき、児童自身が学習に見通しをもつ場を設定した。

また学習の過程において、ゴールとゴールに対する現在地を確認する場を設定し、自分の学習状況を把握しながら、主体的に粘り強く課題解決に取り組めるようにした。



2年生の算数「かさ」の導入では、様々な容器のかさをLで表す活動を設定した。そこで、Lでは表せない余りが生じることから、既習事項である長さの単位（cm、mm）との関連をもとに、小さい単位の必要性に気づかせた。その気づきをもとに、「単位を使ってかさを表せるようになる」という単元のゴールを共有し、学習の見通しをもたせた。

柱2 学び方の選択（個別最適な学び）の実践



児童自身が自分の強みや課題を理解し、自分に合った学び方を選択できるよう、単元の中や1時間の授業の中に学び方を選択する時間を設定した。自分の課題に対して、試行錯誤を重ねながら、ICTを活用して自分に適した学び方を選び、学習の過程や結果を振り返って改善しながら学習を進めた。



6年生の体育「ラリーをつなげ！ミニテニス」では、技能の定着を目指す場面で、自分の課題に応じて練習する場所や内容を選択できるようにした。ドリルゲームを選択制にしたり、作戦を考える場面を設定したりするなど、児童が自ら学び方を選択できるように工夫した。ボール運動系は活動場所の設定に制約があるため、学習の個性化には課題が残った。

柱3 話し合いの視点（協働的な学び）の実践



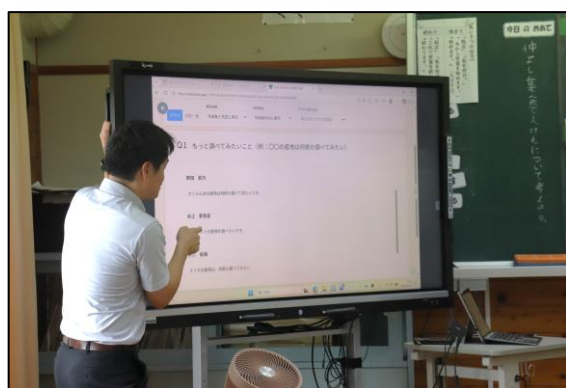
対話の目的を明確にし、「納得解」を形成するためのコーディネートを重視して話し合いを行った。児童が、友達の意見を参考にしながら、自分の考えを深め、考えを修正したり付け加えたりする姿が見られた。体育では、技能の向上につながる言葉を共通言語として共有し、視点をもって対話できるようにした。その結果、技能や経験に差のある児童も互いに関わりながら主体的に学ぶことができた。



3年生の国語「給食だよりを読みくらべよう」では、児童の発言を関連付けながら、たより①・たより②の優劣を決めるのではなく、書き手の工夫と読み手の受け止めを結び付けて考えるという視点をもたせた。その結果、友達同士での読みを深めることができた。

6年生体育の学習では、それまでの自分やチームの特性を振り返らせることで、自分たちのチームに合った作戦を選ぶ姿が見られた。

柱4 学びを価値づける（振り返り）の実践



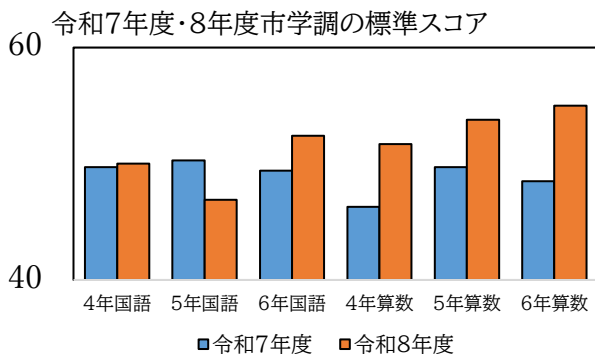
昨年度の研究では、振り返りの視点として「学び方」「自分の強み・弱み」「もっと学習したいこと」の3つを設定し、児童が自らの学びを振り返る取組を進めてきた。しかし、研究を深める中で、振り返りは一つの型で行うのではなく、単元の進行状況や教科の特性に応じて内容を変えることが重要であると考えた。単元導入では学習への見通しをもたせ、中盤では思考や協働の過程を整理し、終末では成長や学びの価値を実感するなど、目的に応じた振り返りへと改善を図った。



3年生国語の学習では、単元終末に「前の自分と今の自分の変化」や「生活につなげる視点」から振り返りを行った。児童は、単元初めと終末の自分の考えを比較することで、考え方の変容を実感し、自らの成長を捉えることができた。また、生活につなげる視点では、学校から配付される様々なたよりの中から書き手の工夫を読み取りたいものを見つけた。

成果と課題

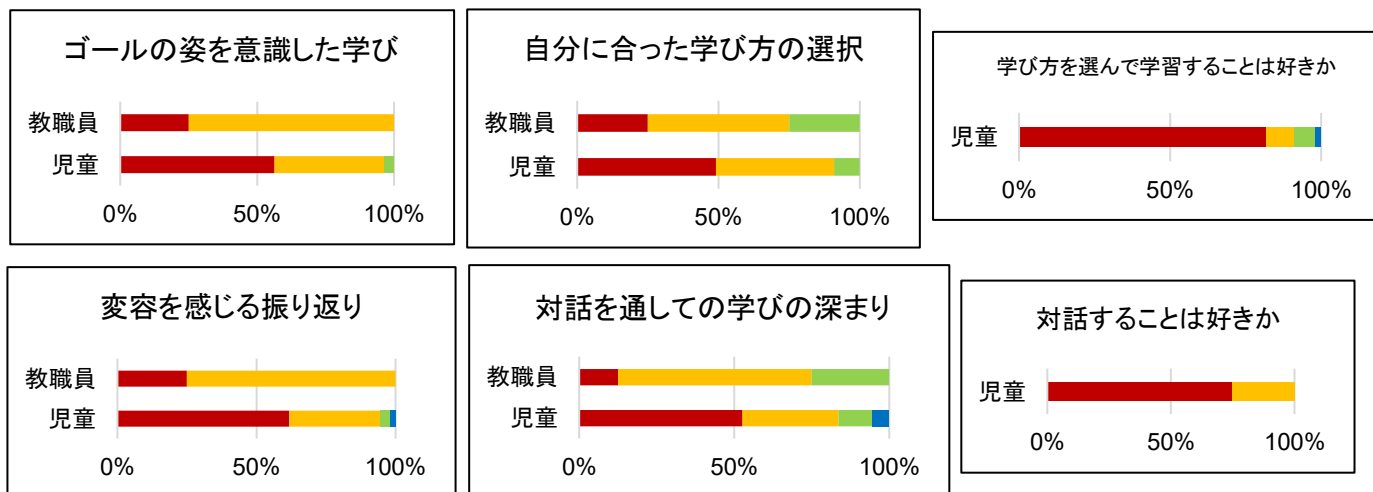
学力調査（経年変化）の結果より



令和7・8年度の菊池市学力学習状況調査の標準スコアによる経年比較を行った。国語では4・6年生で伸びが見られた。算数では、4・5・6年生で伸びが見られた。また、令和8年度の正答率では、国語では3・4・6年生が市・全国平均を上回り、算数では全ての学年で市・全国平均を上回る結果となった。

児童・教職員アンケートより

肯定的な意見 ← ■ ■ ■ ■ → 否定的な意見



- ゴールの姿を共有することで、学習の見通しをもち、ゴールを意識して学ぶ児童が増えた。
- 対話を好む児童が多く、対話を通して考えを深める学びにつながった。
- 振り返りを通して、自分の学びや変容を自覚することができた。
- 学力調査においても、複数の学年で標準スコアの上昇が見られた。
- ICTを児童の学びを深めるための手段として活用することで、児童が自分の考えを表現する機会や、友達の多様な考えに触れる機会が増えた。また、学習の記録を蓄積することで、児童自身が学びを振り返り、学習の過程や自分の成長を実感することにもつながった。
- ▲自分に合った学び方を選択するための視点や判断力を育てる必要がある。
- ▲「対話すること」から「対話によって考えを深めること」へと、対話の質を高める必要がある。
- ▲自分の学びや変容をより具体的に捉え、次の学びにつなげる振り返りの充実を図る必要がある。

研究のまとめ

本研究では、「ゴールの姿の共有」「学び方の選択」「対話」「振り返り」を柱とした授業づくりに取り組んだ。その結果、児童が見通しをもち、自分に合った学び方を選択し、対話を通して考えを深める姿が見られた。また、振り返りによって自分の学びや変容を自覚することにもつながった。今後は、ICTのよさと、対話・体験・実物・紙媒体などのよさを適切に組み合わせながら、児童が自分に合った学びを自覚でき、対話が深い学びへとつながるようなコーディネートの方について研究を進めていきたい。

